論　文

古代製鉄から解く地名「行々林」の謎

吉開　潔

1．はじめに

本稿で取り上げる地名「行々林」は、「おどろばやし」と読む。なぜそう読むのか何とも不可解である。この地名は、千葉県の下総台地西部に位置する船橋市の豊富（とよとみ）地区にあった旧村名・大字（おおあざ）名で、昭和30（1955）年に「鈴身（すずみ）町」と改称され消失した。そのため江戸期には諸史料に見えるその名も、今では近くのバス停でしか直接目にすることができない（写真１）。

写真１　バス停：行々林入口

しかし、不気味な音韻と超難読な漢字表記が関心を引いて、消失後もこの地名は地名書籍やネット上のホームページ等に多々登場する。日本地名研究所・第２代所長であった谷川彰英も著書で幾度となく取り上げている[1]。

谷川はその中で、この「行々林」の地名由来を「棘（おどろ）」、「草木の乱れ茂っている状態、またはその場所」と解き、「棘」は古語の「おどろおどろし」にもつながると述べている。角川書店刊『角川日本地名大辞典　千葉県』（以下、『角川地名辞典』）や平凡社刊『日本歴史地名大系　千葉県の地名』（以下、『歴史地名大系』）をはじめ船橋市の公式サイト[2]などを見ても、全体的に「草木が茂っている状態・所」によるとの説が有力だ。確かに現地は台地斜面等に雑木林が繁茂している。

だが日本の国土全体の森林率は約７割であり、昔も鬱蒼とした林は随所にあったに違いない。そう考えると「行々林」は、「ある土地を他の土地と区別する一つの特徴を表現し、土地の住民と他者との彼我に共通する合意が成立する」地名[3]とはいえない。地名はもっと具体的に地形の特徴や人間生活の様子を語るものであろう。

漢字表記については「行っても行っても林だったから」と由来を解き、それを古人の知恵とした説もある。しかし、千葉県印西（いんざい）市に小字（こあざ）「行々地（おどろち）」が現存する[4]ことから、これは後世の安易な解釈の域を出ない。「『行々』の字を当てたのは、『ぎょうぎょう』が驚く、あるいはおどろおどろしいにふさわしいと考えたから」という船橋市公式サイトの説も腑に落ちない。では一体、「オドロ」とは何か。なぜ、その表記が「行々」なのか。この疑問を解明するために地理、歴史、言語の面から調査研究を進めてきた。その結果、古代製鉄と渡来人の移住、修験道が深く関係するとの見解に至った。以下、その考察過程や推論の根拠について論ずる。

2．全国「オドロ」地名の調査と属性に関する考察

まず「オドロ」の意味を明らかにするため、全国の「オドロ」の音を有する地名（以下、「オドロ」地名[5]）を検索・収集し、それらに共通する属性を探った。作業に際しては、『角川地名辞典　別巻Ⅱ　日本地名総覧』総索引等で検索するアナログ的な方法と、『地理院地図』の地名・住所検索機能やインターネットを活用したデジタル的手法とを併用した。そうして収集した全国33箇所の「オドロ」地名に、それぞれの現状・来歴等の簡略な説明を付して一覧表にした（表１）[6]。

表１　全国「オドロ」地名一覧

№.	所在地	地名	読み	説明
1	佐賀県　鳥栖市	荊	おどろ	儀徳町に存在する小地名
2	福岡県　久留米市	*荊津*	おどろつ	大善寺中津町にあった旧村名
3	大分県　由布市	*ヲドロ*	おどろ	旧柿原村上野にあった小地名
4	愛媛県　宇和島市	於泥	おどろ	津島町下畑地に存在
5	〃　今治市	*オドロ*	おどろ	旧伊予国府内にあった狭小地名
6	山口県　山口市	大土路	おおどろ	徳地柚木に存在
7	広島県　広島市	*悪泥*	おどろ	旧五日市町にあった小字
8	岡山県　井原市	於土路	おどろ	旧井原市東江原町の小字
9	〃　赤磐市	ウドロ	うどろ	旧赤坂町山手の小字
10	〃　瀬戸内市	ヲドロへ	おどろへ	旧長船町東須恵の小字
11	〃　新見市	ヲドロ	おどろ	旧新見市千屋の小字
12	〃　鏡野町	いどろぎ	いどろぎ	旧鏡野町塚谷の小字
13	〃　〃	大どろ	おおどろ	旧鏡野町寺元の小字
14	〃　津山市	ウドロ	うどろ	旧勝北町西下の小字
15	〃　美作市	ホドロ峪	ほどろさこ	旧東粟倉村青野の小字
16	京都府　京都市	山田御道路町	やまだおどろちょう	西京区にある現町名
17	福井県　福井市	大土呂町	おおどろちょう	市南部にある現町名
18	愛知県　豊橋市	於泥	おどろ	大村町にある小字
19	千葉県　市原市	小土呂坊	おどろぼ	加茂地区養老にある小字
20	〃　大多喜町	小土呂	おどろ	旧村名　大字名として存在
21	〃　長生村	驚	おどろき	一ツ松村の分郷　大字名として存在
22	〃　白子町	驚	おどろき	旧村名　大字名として存在
23	〃　船橋市	*行々林*	おどろばやし	鈴身町の旧称　旧村名・大字名
24	〃　八千代市	行々林道	おどろばやしみち	旧睦村島田台の小字
25	〃　印西市	行々地	おどろち	旧印西町平岡の小字
26	埼玉県　熊谷市	*男沼*	おどろ（ま）	旧村名　現在は大字で呼称は「おぬま」
27	栃木県　鹿沼市	*ヲドロシ*	おどろし	旧粟野町中粟野にあった小字
28	〃　日光市	荊沢	おとろざわ	旧村名　大字名として存在
29	福島県　郡山市	音路	おとろ	富田町に存在　かつては乙路
30	〃　相馬市	*小登呂崎*	おどろがさき	旧長老内村にあった大字名
31	山形県　小国町	驚	おどろく	旧村名　大字名として存在
32	岩手県　遠野市	踊鹿	おどろか	青笹町糠前９番地に相当する小字
33	秋田県　大館市	*小泥村*	おどろむら	江戸期、外川原村にあった旧支村の名

※　表中の斜字体の地名は消失地名を表す。№12「いどろぎ」近くに「いどろぎ東」「いどろぎ口」「いどろぎ口道上」が存在するとされるが、「いどろぎ」に包括。№29「音路」に隣接して存在する「乙路後」（おとろせと）も同様の扱いとした。また、№26「男沼」は、現在の呼称が「おぬま」と大きく変わっているため消失扱いとした。

載録した地名は旧村名または大字名のほかに小字名・町名が多いが、狭小な土地の呼び名もある。消失したものも少なくない。「オドロ」地名は実に多様である。次に、この表１を基礎に「オドロ」地名の分布を可視化して語源や意味解明の糸口をつかもうと考え、全国分布図を作成した（図１）。

また同時に、それらの作業と並行して載録地名各地の地勢や略史を地形図・文献で適宜調査し、さらに周辺地名の特徴にも注目して「オドロ」地名の当該地全体に共通する属性や傾向性を多角的に探った。なお、現地調査は千葉県内を中心に８箇所で実施した（2021 年９月末現在）。

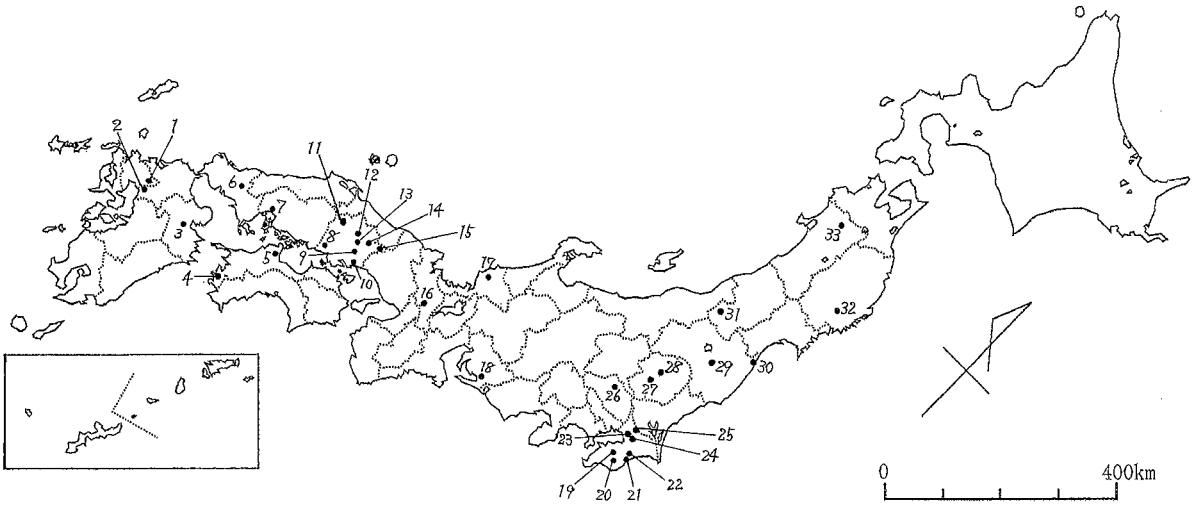

図１　全国の「オドロ」地名の分布　※図中の数字は表１中の№と一致する。

さて表１と図１から、「オドロ」地名は北九州から東北地方まで広範囲に分布している様子がわかる。表記は一字一音による漢字表記、カタカナ表記、ひらがな表記、漢字一文字など千差万別で使用漢字も様々である。「驚」地名が３箇所もあったり、岩手県遠野市の「踊鹿」のようにユニークな表記にも遭遇したりして調査・分析は興味深いものであった。

そのような調査を進めていくうち、「オドロ」地名各地に共通する事象を見出すことができた。一つは「オドロ」地名が地形的に山地や丘陵・台地の谷間（谷津（やつ））や麓をはじめ川沿いの沖積地にあること[7]、もう一つは当該各地の周辺に製鉄遺跡や製鉄に関わる地名（以下、「産鉄地名」）が見られることである。

例えば、表１の№30福島県相馬市の「小登呂崎」ではすぐ側で平安期の製鉄炉が発見されている。同№33秋田県大館市の「小泥村」は既に江戸期に消失しているが、同村比定地の字切図（あざきりず）には「タタラ」という地名があった。他の「オドロ」地名も同様で、各地周辺には製鉄遺跡が存在したり産鉄地名が分布したりしている。

図１を今一度、見てみる。「オドロ」地名は岡山県と千葉県に集中しているのが目を引く。両地域には多数の古墳が築造され、溜池をはじめ土木灌漑地が幾つもあり共通点が多い。岡山県の歴史に関して、鍬で名高い旧備中国が律令国家へ鉄を貢納していたことは説明を要しまい。一方、千葉県も下総台地の印旛沼周辺や県北西部など古代製鉄の盛んな地域であった。「行々林」に程近い八千代市・沖塚遺跡からは全国でも最古級の鍛冶炉跡が検出され、ひと頃耳目を集めた。まさに両地域は古代製鉄の拠点であり、産鉄地名の宝庫といえる。

そこで「オドロ」地名と古代製鉄の関係を調べていくと、「岡山県内の製鉄（たたら）地名」と題したネット情報に「オドロ」の解説を発見した[8]。その典拠は『岡山県大百科事典』で、同書の「おどろ」の項を見ると「フジ、カズラなどのつるになった枝、またはその茂みをいう方言。岡山県北の山地で使用される…」とあった[9]。執筆者は国語学専門の地名研究者・鏡味明克である。また前出ネット情報には、他に砂鉄採取法の鉄穴（かんな）流しの説明もあり、その典拠、真弓常忠著『古代の鉄と神々』に当たると次の記述が見られた[10]。

> 「鉄を採るには、鉄砂の多い山の下で、川の流れのあるところを選び、山の土砂を流れに崩し入れ、急流で洗うと、土は流れ去り、鉄砂のみのこる。鉄砂はザルで採るが、そのザルに莚を用いたという。（中略）流水の中であるから藁の莚ではもたないし、竹のザルでは固きに過ぎるわけで、藤蔓（ふじつる）で編んだものをもっとも良しとするのである」（ルビ及び下線、筆者）。

この一節は、前述した「オドロ」地名各地に共通する地形的特徴と符合するとともに、「オドロ」の意味で

ある「藤蔓」が古代たたら製鉄原料の砂鉄を採取する鉄穴流しの莚に用いられた状況を説明している。古代製鉄との関係性から、「オドロ」地名の語源や由来を解明する糸口がつかめた。

３.「オドロ」地名の語源・由来と伝播に関する考察

ここまでの調査結果等を整理すると、次の４点になる。

①「オドロ」とは単に草木、いばらなどの乱れ茂っている状態・所をいうのではなく、古代製鉄と深く関係する語と考えられること
②具体的に「オドロ」とは、たたら製鉄原料の砂鉄を採取する原初的な鉄穴流しの莚に用いた「藤蔓」を意味すること
③「オドロ」地名は、共に古代製鉄文化の拠点であった岡山県と千葉県に多く分布していること
④川の自然の流れを利用する原初的な鉄穴流しの場所は、「オドロ」地名各地の地形的特徴と合致すること

これら４点と、古代製鉄技術は朝鮮半島から渡来人が伝えたという史実、加えて古代吉備国に当たる地域では地名や伝承、遺跡等から渡来系の秦氏（はたうじ）が活躍したと考えられることを総合すると、「オドロ」は古代たたら製鉄技術を有した秦氏が、同地から下総をはじめ砂鉄採取地へ移住し伝播した産鉄地名ではないかと推理できる。そこで、この推理の妥当性を考証するため、古代たたら製鉄における「藤蔓」の意味、秦氏移住に伴う下総への地名伝播の可能性、そして「行々林」における産鉄地名の存在状況について、さらに調査研究を進めた。

⑴　古代たたら製鉄における「藤蔓」の意味と「オドロ」地名

古代たたら製鉄における「藤蔓」の意味を解く有力な手がかりとして、諏訪大社（長野県諏訪市）の縁起書『諏訪大明神絵詞（えことば）』がある。その詞書は、出雲から藤枝をもって諏訪の地にやって来た建御名方（タケミナカタ）神が、鉄輪（鉄鐸のこと）をもった土着の洩矢（モリヤ）神を伏せしめたと伝える。前述の真弓常忠は、これを出雲族の諏訪地方への政治的進出ととらえるだけでは十分でなく、新旧の製鉄集団による抗争を意味していると解く。すなわち、藤枝（藤蔓）で編んだ莚を用いて採った砂鉄を原料とする、たたら製鉄技術（フイゴを使って高温で砂鉄を溶かす）をもった集団が、湖沼や湿地の葦などの根に生るスズ－褐鉄鉱の塊り－を原料とする原始的な製鉄技術（低温で熱して叩くだけ）をもつ集団に勝ったことを表していると解釈した。

そこで真弓は、たたら製鉄原料の砂鉄を選別・採取する莚の材料として藤蔓で編んだものが最良ということと絡めて、「藤の枝とは（中略）『鉄穴流し』による砂鉄採取の技術を象徴したのである」と結論づけた。これに依拠すれば、「オドロ」地名は藤蔓の莚を用いて、たたら製鉄の原料となる砂鉄を川から採取する場所に命名されたと由来を説明できる。事実、後述するように旧行々林村と近いところには「藤」の付く地名が見られ、またそれらの周辺には、たたら炉や鍛冶に因む地名もある。そうした実際の産鉄地名の分布からも、前述の「オドロ」地名の由来に関する説明は妥当なものといえよう。

⑵　旧備前国等と旧下総国の相似地名

古代吉備国が分割され成立した旧備前国等から下総の地へ秦氏が移住し、地名が伝播した可能性については、両地域に見られる相似地名から考証できると考え、旧備前国（以下、「備前」）「ヲドロヘ」（表１の№10）と旧下総国（以下、「下総」）「行々林」の一帯を対象に、相似した産鉄地名を拾い上げ対比してみた（表２）。

表２　備前と下総の相似地名の例　※斜字体の地名は現在消失

	備　前（備中を一部含む）		下　総（西部地域）		地名の意味
	地名	所在地	地名	所在地	（筆者の解釈・説）
1	ヲドロヘ	瀬戸内市	*行々林*	船橋市	藤蔓の莚を用いて、川の水流から、たたら製鉄の原料となる砂鉄を選別・採取する所（前出）
			行々地	印西市	
2	藤木	瀬戸内市	藤ヶ谷	柏市	藤の木が繁茂している所または谷
3	菖蒲谷	和気町	菖蒲谷津	八千代市	鉄気を含んだ土の谷　音韻「ショウブ」はソブ（鉄）の転
4	芋之久保	岡山市北区	神久保	八千代市	鋳物を造った凹地の場所　音韻「イモノ」は鋳物の意
5	佐山	備前市	佐山	八千代市	砂鉄分を含んだ土壌の丘陵地　音韻「サ」は鉄の意
6	船穂	倉敷市	*船穂*	印西市	船は製鉄炉、穂は燃えさかる火の意　たたらと同意か
7	多々羅井	和気町	多々羅田	印西市	たたら製鉄が行われた場所

（資料：『角川地名辞典』岡山県、千葉県各巻末の小字一覧）

表２からは、限られた範囲の中でも相似した産鉄地名が対を成して幾つも存在することがわかる。ちなみに、４の下総側の地名「神久保」は「いものくぼ」と読む。備前の「芋之久保」と表記は違えど読みは同じである。

もっとも、こうした相似地名は同じ条件や類似環境下であれば、異なる場所に同時発生するようなことがあるかもしれない。しかし、一定地域内に他地域との相似地名が数多く存在するとなると、同時発生の可能性は低いと考えられる。豪族や氏族あるいは地縁的・組織的集団が移住し、故地の地名を新住地に付けた結果と考えるのが自然であろう。清教徒の北米移住の例を引くまでもなく、地名が個人や集団の移動により伝播・移動することは古今東西、普遍の真理でもある。したがって、表２の相似地名は、遥か備前方面から下総の地へ製鉄技術をもった集団、すなわち秦氏が移住したことを物語る証拠と考える。

ところで、日本で砂鉄を原料として鉄が造られるようになったのは５～６世紀頃で、備前や備中平野部で鉄生産が行われたのは８世紀代までが中心といわれている[11]。一方、房総における原始的製鉄は古墳時代に始まり８世紀には域内各地で本格的に操業され、９世紀後半以降では鋳造鉄器の生産が遺跡から確認されている。秦氏については諸説あるが、大和岩雄は５世紀前後から６世紀前半に主に加羅地方から渡来した集団と推定している[12]。その後は豊前国を拠点として徐々に畿内へ進出し時の政権に重用され、産鉄や灌漑施設、養蚕など各種技術部門で活躍した殖産氏族だったとされる。改めて図１を見ると、「オドロ」地名が北九州から瀬戸内、そして京都の太秦（うずまさ）辺りへと繋がり、秦氏の東遷が彷彿とする。また、秦氏は芸能民や修験者等とも結びつきが強かったほか、その財政力でヤマト政権及び律令政府に影響力をもち東国経営に翼賛したともいわれる。

下総の印旛沼西方一帯には、鳥見（とみ）神社と宗像（むなかた）神社がそれぞれ集中鎮座している。これは古代豪族の物部氏、宗像海洋族が、海路この地に移り祖神・祭神を祀ったことに由来するとの研究がある[13]。物部氏は５、６世紀頃に美作（みまさか）地域の製鉄集団を支配していたとされる。つまり、物部氏と秦氏の拠点はある時期、近接地にあった。また、秦氏と宗像一族とは新羅との交流を媒介して密接な関係が認められる[14]。そのため国の財政に関わった秦氏と、軍事・祭祀を司った物部氏とは協力関係にあったと思われる。秦氏、物部氏、宗像氏三者の関係や移住時期等の詳細な究明は筆者の探究力を超える。ただ下総には、表２の相似地名の他にも「白幡（しらはた）」「浦幡（うらはた）」など秦氏に所縁があると考えられる地名が散在し、地名から秦氏の足跡は裏付けられる。８世紀に入り奈良朝が蝦夷（えみし）領域への勢力拡大を進めると、下総は東国経営の拠点へ武器や農工具、食糧等を補給する兵站地の役割を担った[15]。こうした動向に伴い、８世紀後半には秦氏の房総への移住が本格化したのではないかと考える。

⑶　旧行々林村一帯の小字地名

旧行々林村一帯の産鉄地名の存在状況については、小字地名から探った（図２）[16]。図２の中央には谷津田が南北に続き、鈴身川が北流している。

まず、鈴身川上流域に「子ノ神（ねのかみ）」がある。子ノ神は産鉄民が信仰する神であり、この地名は製鉄の仕事を司る村下（ムラゲ）が三夜四日、寝ずにたたらの火を見続けるため「寝不見」といわれ、子（鼠）にかけたことに因むとの説がある[17]。「御竹（みたけ）」には真言宗豊山派の蓮蔵院と村の鎮守・鈴身神社（祭神は鉄神スサノオノミコト）がある。この小字は「御嶽」と同音同義で拝所の意があり、例えば青梅市の武蔵御嶽神社に伝わる太々神楽の鍛冶の面が一ツ目（炉の火加減を覗く村下の職業病を投影）であることなどからも、たたら製鉄に結びつく地名と考えられる。

図２　旧行々林一帯の小字地図（原寸× 0.6）
（『船橋小字地図改訂版第３編第６図』を一部加工し、作成）

これと隣接する「稲居原（いないばら）」と車方町の「稲原（いねばら）」は、いずれも「稲」の文字が付くため稲作と結びつけがちだが、これらは「鋳土（イナ）」又は「鋳土粉（イナコ）」に由来し「砂鉄」の意がある[18]。神奈川県湘南海岸の有名な「稲村ヶ崎」では浜砂鉄が産出するが、それと同じである。文字よりも発音が地名の原意を示す場合が多いことに留意すべき好例といえる。「稲荷鼻（とうかはな）」については、「稲荷」の文字を「いなり」と読むと「鋳成り」に通ずる。ちなみに、お稲荷様は秦氏の氏神である。

「堰場（せきば）」は、ここで川の流れを堰き止めて砂鉄を採った場所ではないかと想像する。幕末期の「先大津阿川村山砂鉄洗取之図」[19]を見ると、堰を設けて川から砂鉄を掬う様子が描かれていて参考になる。「台畑（だいばた）」と「台（だい）」については製鉄炉があった場所に多く見られる地名で、「だい」はダイダラボウ＝大タタラ坊に由来するとの解釈もある[20]。よって、鈴身川流域には砂鉄・たたら製鉄由来の小字が多数存在するため往古、旧行々林村一帯では鉄穴流しが行われ、「オドロ」地名が伝播した蓋然性は高いと考える。

４.「オドロ」の漢字表記「行々」に関する考察

前項で「オドロ」地名の語源・由来とその伝播について究明した。ではその漢字表記がいつ、どうして「行々」になったのか。これらの点は史料等の記録から遡って、直接証拠づけることが難しい。そこで、『歴史地名大系』の記述を主に「行々林」地名の発祥・変遷等の経過を整理し、推論の基礎資料とした（表３）。

表３　「行々林」（オドロバヤシ）地名の発祥・変遷・消失

時　　期	地名表記等	記載資料等
古　代 ８世紀後半頃	オドロなどと呼称したか	筆者の推定
室町時代 応永17（1410）年	おどろがうや または 荊荒野	香取造営料足納帳（静嘉堂文庫）
江戸時代 慶安期（1648～1652）年 寛文４（1664）年 元禄期（1688～1704）年	行々林村 行々林村 ヲドロバヤシ	高城古下野守胤忠知行高附帳 松平乗久領知目録（寛文朱印留） 元禄郷帳での訓
近　代 明治22（1889）年	行々林	村名から豊富村の大字名へ
現　代 昭和29（1954）年 昭和30（1955）年	行々林 鈴身町	船橋市の大字名へ １月１日、鈴身町と改称、消失

（資料：『歴史地名大系』及び『角川地名辞典』）

既述のとおり「オドロ」地名は８世紀後半には、国策により備前方面から秦氏の一族が砂鉄等の産鉄条件に恵まれた下総の地に移住したことで伝播したものと推定する。室町時代になると、旧行々林村に比定される地では開墾が進められ、香取造営料足納帳には「おどろがうや」または「荊荒野」と記されている。

それが「行々林村」という村名となって史料で確認されるのは、江戸時代初め慶安期の「高城古下野守胤忠知行高附帳」である[21]。同史料は現在の松戸市を本拠とした戦国時代の豪族・高城氏関係文書であり、高城氏支配地の村々とその石高等を旧家臣が記したものとされている[22]。したがって、漢字表記「行々林」は室町・戦国時代から江戸時代の慶安期までの間に発祥したと考えられる。

これを踏まえ「行々林」の地から近く、同じ「行々」表記を含む印西市の小字「行々地（おどろち）」の地域的特色をとらえ、「行々地」地名の発祥と由来を究明することとした[23]。またそれと併行して、中世・近世移行期における下総の社会状況も調べて「行々地」と旧行々林村との関係性を探り、「行々」表記の解明を試みた。

⑴ 「行々地」の地域的特色と地名由来

「行々地」は下総台地北西部、利根川下流右岸に位置し（図３）、近世には印旛郡平岡村の字であった。平岡村は近代に入って木下（きおろし）町の大字となり、その木下町は昭和29（1954）年に近隣三町村と合体して印西町となって平成８（1996）年に市制施行した。現在、印西市は千葉ニュータウンを擁する近郊都市として著しい発展を遂げている。

船橋市はその印西市の南西方にあり、「行々地」と旧行々林村とは直線距離10数キロの位置関係にある。地形的に両者は面積の広狭こそあれ、共に台地と谷津とで構成されている（図３）。旧行々林村の小字に産鉄地名が多いことは前述したが、「行々地」も古代から中世に製鉄・鍛冶が行われた場所であったと考えられる。

その根拠として、「行々地」（「オドロ」の意味は既述）の近くには、「鍛冶屋下」＝鍛冶が行われた

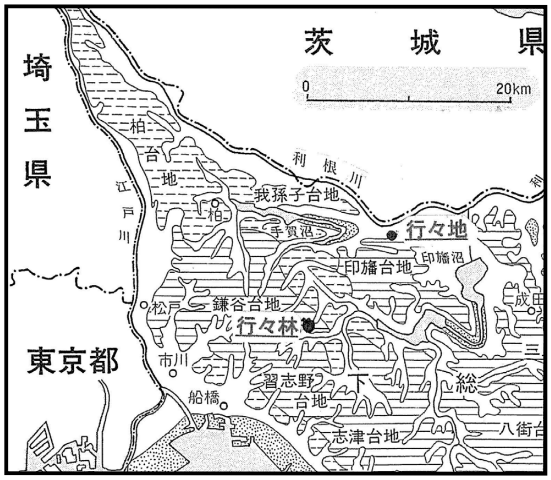

図３　「行々地」と「行々林」の位置
（『角川地名辞典』1536頁の地形分類図を一部加工し、作成）

高台の下の土地、「臺（台）」「臺方（だいかた）」＝たたら製鉄が行われた場所（既述）、そして「別所（べっしょ）」＝一説に蝦夷の捕虜を産鉄、採鉱労働者として住まわせた場所[24]など、産鉄地名が集中して存在する（図４）。

また、別所には天台宗寺院・地蔵寺の境内に熊野神社が祀られており、熊野系の修験者が紀伊半島から移住し、生国で崇拝していた熊野社を勧請したことが察せられる[25]。修験者（山伏）は「山伏の行くところ鉱山あり」の言葉どおり、採鉱や産鉄に関する知識・技術をもっており、山野を跋渉し全国遊行した彼らは草木や各地の地理にも精通していた。

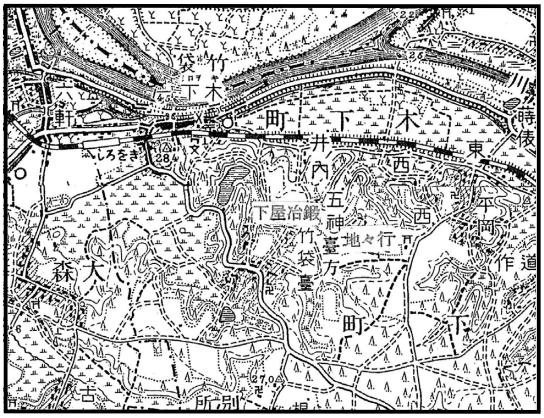

図４　「行々地」の周辺
（５万分の１「龍ヶ崎」明36測と「佐倉」明37測に小字名を貼付するなど一部加工し、作成）

「行行」については、諸橋轍次著『大漢和辞典　巻十』に「剛強なさま」〔論語・集解〕と記されている[26]。『論語集解』は儒教の根本文献・論語の完全注釈で、魏の儒学者・何晏（かあん）が著した。修験道は山岳信仰に仏教等が習合した呪術信仰だが、儒教思想も入っている。とすれば、修験者によっては一定の儒学・漢学知識を有していたとも考えられる。

藤蔓の繊維は摩耗に強く水に濡れるとさらに強くなる。だからこそ古くから衣料や民具等にも利用された[27]。藤蔓には他にも、たたらの守護神・金屋子神（かなやごがみ）が犬に追われたとき藤蔓につかまって助かったとの伝承があるし、諏訪大社（前出）の御柱大祭では神木を曳行するのにも用いられている。そのため藤蔓の性質や含意等を解していた熊野修験者が、房総に多くの熊野権現が勧請された戦国期に、「オドロ」の意味である「藤蔓」の剛強な材質から平岡村の砂鉄採取地の「オドロ」地名に漢語の「行行」を当てて（後に二文字目が踊り字「々」になり）、地名「行々地」が発祥したのではないだろうか。

⑵　中世・近世移行期の下総の社会状況[28]

中世末から近世初期への移行期において、下総を含む房総の地は激動の渦中にあった。天正18（1590）年４月、豊臣秀吉の大軍が小田原の北条氏討伐を進める中、下総では秀吉配下の武将や徳川家康の重臣らにより北条方の諸城が一気に攻略される。そして８月、新たに関東一帯の支配者となった家康が江戸城に入り、翌年の天正19（1591）年２月には、印旛郡から検地が早速に開始された。

実はこの時期の数年間、房総各地は深刻な飢饉に襲われ、物乞いや餓死者が溢れる有様だった（鋸南町妙本寺文書）。加えて文禄２（1593）年の秋には、大風により稲穂が倒壊し大被害も受けている。さらに前後して秀吉の朝鮮出兵計画に関わって、家康の領国各地に夫丸（ぶまる）（軍事物資や食糧の運搬に当たる人夫）を出すよう命令が下される。こうした飢饉や様々な苦難が続く中、房総の農民の多くは耕作を放棄し村々から離散した。

船橋市内の現存する検地帳から、筆者は旧行々林村の検地時期を慶長７（1602）年と推定する[29]。もしそうならば、「行々地」から離散した農民が元居住地の「行々」の表記を伝えた可能性も考えられる。音韻「オドロ」に表記「行々」を当てている例は、実質的に「行々地」と「行々林」の２例のみである。「行々地」と旧行々林村は距離的にも近い。だが筆者には、熊野修験者によって表記「行々」が「行々地」から伝わり、それが新村名「行々林」の発祥に繋がったと思われてならない。次に、その推論の根拠について述べる。

⑶　熊野修験者と地名「行々林」の発祥

地名「行々林」の発祥に熊野修験者が関与した可能性を考証するため、「行々地」と旧行々林村との関係性や共通点、加えて鉱物資源と密接に関わり、房総の地とも縁の深い熊野修験者[30]に関する事柄・事象について整理した。次に５点を挙げ、それらを基に推理を進める。

①「行々地」は小字、「行々林」は村名であるということ
②「行々地」と旧行々林村とは同じ地形であり、共に周辺は産鉄地であったと推定されること
③「行々地」と旧行々林村の近くには、共に熊野神社が鎮座していること
④修験者は密教はじめ諸思想、自然・鉱物に関する知識や各地の地理に通じ、地名命名の知見を有すること
⑤中世から近世期、修験者は戦国大名や大名に重用され、その一方で各地の村人とも交流があったこと

①については、小字の意味を確認することが大切である。小字は元々、村を構成する小範囲を「字」と呼んでいたものが、近代の町村合併で旧村が「大字」となったことに連動し、それまでの字と区別して「小字」と呼ばれるようになったものである。小字は概して歴史的に古く自然発生的な性格を帯び、小範囲であるだけに土地の自然や人々の生活との密着性が感じられるものが多い。そうしたことから、「行々地」の方が「行々林」よりも古い地名であると推定される。そのため、同じ表記「行々」を有する両地の間で人による地名の伝播があったとすれば、「行々地」から旧行々林村へ伝わった可能性が高い。…（ⅰ）

②については、既述のとおりである。③については、「行々地」近くの別所にある熊野神社に関しては既述した。旧行々林村の方は、八千代市の桑橋（そうのはし）に熊野神社が鎮座する。旧行々林村とは目と鼻の先である。したがって、「行々地」と旧行々林村の両地域はかつて産鉄地と推定されるのに加え、共に熊野神社が近くに存在することから、双方を熟知する熊野修験者が、それぞれの周辺地一帯を行脚していたと考えられる。…（ⅱ）

④についても、その一部は既述したとおりである。修験者が密教や呪法の修行等から得た宗教・思想に関する見識や山野を跋渉して得た自然・地物の知識、鉄等を求めて得た鉱物資源に関する知識は、地名創案の基盤になる知見ともいえる。修験者以外、これらを遍く有する者はそういない。…（ⅲ）

⑤について詳述すると、修験者は全国の地理、情報に精通していたため、戦国大名から従軍僧、使僧、忍者として重用された。近世には彼らを護持僧にする大名もいた[31]。その一方、修験者は各地の村人の求めに応じて、加持祈祷、配札、村祈祷等の他、施餓鬼法、鎮宅法、日の吉凶等の修法、符呪の類では種々の病気、憑きものおとしなど多岐にわたる宗教活動を行った。また、毒消しや血どめ等の薬も出しており、地域社会における村人との交流がうかがえる[32]。したがって、村名命名の決裁過程・手法がトップダウンであれ、ボトムアップであれ、修験者はそのどちらにも関わることができる立場・状況にあったと考えられる。…（ⅳ）

よって、上の（ⅰ）～（ⅳ）から総合的に思量して、熊野修験者が表記「行々」を「行々地」から伝え、新村名「行々林」発祥に関与した可能性は高いと推理する。

最後にもう一つ、「行々林」の「林」の意味と表記についての考察も忘れてはなるまい。「林」を単に「木の生い茂る所」とするのは安直にすぎる。「行々」が〝剛強〟の意味ならば、それと合わせて全体として完結した意味と表記が意図されたのではないか。「林（樹林）」には「神の社」との解釈もある[33]。とすれば、「行々林」とは「剛強の神を拝し奉る社」の意となる。なるほど神域の木には、厳粛さや霊性を感じる。修験者は、そうした感性も豊かに有していたに違いない。既述のとおり「行々林」の中心「御竹」には、鉄神スサノオノミコトを祀る鈴身神社が樹林の中に鎮座する。地名「行々林」はまさしく、この地にふさわしい。

５．むすびに

以上、本稿では全国の「オドロ」地名33箇所の共通属性を手がかりに、難読地名「行々林（おどろばやし）」の音韻「オドロ」の意味と漢字表記「行々」の由来解明を試みた。その結果、「オドロ」とは古代たたら製鉄原料・砂鉄の採取に用いる莚の材料〝藤蔓〟を意味し、鉄穴流しによる砂鉄採取地に付された地名であるとの結論に達した。具体的に「行々林」地名は、８世紀後半に産鉄技術を有する秦氏の一族が古代蝦夷地域への支配領域拡大という国策によって備前方面から房総の地に移住し故地の「オドロ」地名を伝えたのが、その起源であろうと考えた。

また表記「行々」については、戦国期に下総に移住した熊野修験者が、印旛郡平岡村の「オドロ」地名の小区画に〝剛強〟を意味する漢語「行行」を当て、「行々地」と命名したと推測した。そして、その表記「行々」が戦国期から16世紀末にかけて、下総一帯を行脚していた熊野修験者によって同じ音韻「オドロ」をもつ近接地の「荊荒野」に伝えられ、その後に「剛強の神に拝し奉る社」という意の新村名「行々林」となって発祥したと推論した。あくまで仮説の範囲を越えないが、ここに一試論として提示したものである。推論に傾きがちとなった論考については、今後より幅広く明白な事実やエビデンスを収集し、その実証性を高めるよう努力したい。

学恩に与った日本地名研究所・谷川健一初代所長は「歴史、地理、民俗、言語、地質、動物、植物などの学際的な性格を地名は含んでいる。地名にまつわる伝承には古代史を解く鍵がひそんでおり、地名はまた地下に埋もれた遺物、遺跡などの所在を暗示することがしばしばである」と述べている。この言葉を胸に、今後も産鉄地名の研究に邁進する所存である。

謝辞

本研究を進めるに当たり、新型コロナウイルスの感染状況が厳しさを増す中、表１に掲載した全自治体関係部局並びに安来市和鋼博物館の皆様には電話・メールでの聴き取りや問い合わせ、現地調査等で大変お世話になりました。ここに記して心から感謝申し上げます。

[註・参考文献]

１　谷川彰英編著(1986)『地名を生かす社会科の授業』黎明書房、谷川彰英(2015)『47都道府県・地名由来百科』丸善出版株式会社等の著書あり。最近では雑誌『一個人　2020年５月号 №236』47都道府県日本地名の謎　ＫＫベストセラーズ　に執筆。

２　船橋市魅力発信サイト FUNABASHI Style「船橋市内の様々な地名　北部地区・鈴身町」
船橋西図書館／船橋市デジタルミュージアム：ふるさと船橋の地名を知る　ふるさとの地名（改訂版）
－－船橋の地名の由来を探る－－　江戸時代・明治初期の村名　行々林
後者のサイトには、「行々林」の語源について、「①荊（おどろ）は草木の茂っているさまであり、おどろおどろしに通じ、うっそうとした林の意、②荊棘（おどろ）林で、いばら等の茂っている林の意、③トドロキ林の転化で、近くに滝や勢いよく水の流れる所か湧く所がある林の意等があるが、この内では①説がやや妥当と思われる」との説明がある。

３　池田末則・鏡味明克・松尾俊郎・楠原佑介（1997）『地名の知識１００』新人物往来社、178、183頁。当該頁の記述を参考に地名の概念・定義を筆者なりに規定して、地名語源・由来の各説を吟味・検討する

際の基準としている。

4　本文後掲・表１及び図３、図４参照。「行々地」は『角川地名辞典』巻末の県内小字一覧で発見し、印西市教育委員会提供の資料で現存を確認、現地調査した。同地名の存在を知らなければ、本文後述のような「行々林」表記由来の推論は困難だった。

5　本文後述の方法で、「オドロ」の音を有するか、またはその音韻と同類と判断される地名を検索・収集及び選択し、便宜上それらを「オドロ」地名とした。

6　掲載順は西南日本から東北日本へ府県ごとに整理した。表の下にある注も確認されたい。

7　表１の№24 八千代市の「行々林道」は旧行々林村に隣接しており、地形的には谷津や台地麓でなく標高約 20 メートルの台地面に存在する。旧行々林村に通じるという意で「行々林」に準ずる地名と解釈されるため、地形的特徴の例外としない。

8　HP 浦上　宏「地名と人々の営み」オドロへ　同氏は長船町史編纂委員会編（1995）『長船町史　民俗篇』長船町刊においても、県内「オドロ」地名について解説している。

9　岡山県大百科事典編集委員会　山陽新聞社出版局（1980）『岡山県大百科事典　上巻』山陽新聞社、520 頁。

10　真弓常忠（2018）『古代の鉄と神々』ちくま学芸文庫、84 頁。著者は鉄文化の視点から神話や祭祀を再考証した。

11　角田徳幸（2019）『たたら製鉄の歴史』吉川弘文館、25 頁。鉄の生産地域はその後、備前、備中等から出雲や安芸北部に重点が移る。

12　大和岩雄（1993）『秦氏の研究　日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究』大和書房、29 頁。

13　小倉　博（1974）「印旛沼周辺の神社と古代氏族」―財団法人印旛沼環境基金『印旛沼―自然と文化―創刊号』、73 ～ 74 頁。

14　北條勝貴（1997）「松尾大社における市杵嶋姫命の鎮座について　主に秦氏の渡来と葛野坐月読神社・木嶋坐天照御魂神社の創祀に関連して」国立歴史民俗博物館研究報告 第 72 集、41、64 ～ 65 頁。

15　このことを証する史料の一例として、『続日本紀』の天應元（781）年正月には、印幡郡大領外の丈部の直牛飼に「外従五位下を授く。軍糧を進るを以てなり」の旨の記述がある。

16　滝口昭二（2005）「船橋小字地図改訂版第３編」船橋地名研究会、9 ～ 17 頁。図２は、同書 9 頁掲載の第６図を基図にしている。

17　柴田弘武（2008）『産鉄族　オオ氏　新編東国の古代』崙書房、95 頁等による。

18　前掲 17。106、108 頁。鏡味完二・鏡味明克（1977）『地名の語源』角川書店、83 頁には「イナゴ」は砂地の意とある。

19　発行者：菅　孝宏（2004）『たたら―日本古来の製鉄』財団法人 JFE21 世紀財団に掲載。当該図は東京大学大学院工学研究科に所蔵され、幕末期の長州藩の狩野派絵師の作とされる絵巻で、近世の鉄穴流しの状況が仔細に描かれている。近世以前の原初的な砂鉄採取の様子も彷彿とさせる。

20　前掲 17。106 頁。筆者は、斜面地等を台状に平らに削り取った所に古代製鉄炉が設置されたことに由来するとも類推する。

21　大谷口城跡発掘調査団（1970）『大谷口　松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告』松戸市教育委員会、196 頁。

22　綿貫啓一（1984）『船橋歴史風土記』崙書房、30 頁。

23　前掲 7 参照。「行々林道」も「行々」表記を有した地名であるが、前掲 7 に記述のとおり地名由来につい

ては村名「行々林」に準ずるものと考えられるため、ここでは「行々林道」を比較考察等の対象としていない。

24　柴田弘武（2007）『全国「別所」地名事典（上巻）鉄と俘囚の民俗誌―蝦夷「征伐」の真相』彩流社、240 頁。

25　開館 25 周年記念特別展 図録（2007）「房総と熊野」袖ケ浦市郷土博物館、82、132 頁。

26　諸橋轍次（1959）『大漢和辞典 巻十』大修館書店、138 頁。行部「行」の中に「行行、剛強之貌也。」などと記されている。

27　豊田幸子（1976）「被服構成素材に関する研究Ⅰ－藤布について－」名古屋女子大学紀要リポジトリ所載、100、105、107 頁。藤蔓の靭皮繊維を材料として紡ぎ織られた藤布が、仕事着などの他に米袋や畳の縁布、豆腐のこし布等の生活用具にも使用されていることを論じている。洗濯にも耐え得る実用性から考えて、藤蔓が鉄穴流しの莚の材料に用いられていたのも頷ける。

28　財団法人千葉県史料研究財団（2007）『千葉県の歴史 通史編 近世Ⅰ』千葉県、32 ～ 57 頁。本文論述は当該頁の内容に基づく。

29　前掲 22。47 頁。船橋市内では、大神保村と八木ヶ谷村の検地帳が現存する。行々林村は両村に近く大神保村と隣接していたため、同時期に検地が行われたものと推定した。

30　宮家　準（2012）『修験道の地域的展開』春秋社、457 頁。房総は古くから熊野修験者の修行地だった。

31　前掲 30。476 ～ 477 頁。

32　前掲 30。736 ～ 737 頁。当山派修験・泉光院の宗教活動、豊前の求菩提山の諸修法・符呪等に関する記述から引いた。

33　松尾充晶（2015）「古代の祭祀空間－『出雲国風土記』にみる地域社会の神と社」史林 98(1):3-31、京都大学学術情報リポジトリ所載、8 頁。秋鹿郡の「安心高野」について「…上頭（みね）に樹林有り。此は則ち神の社なり」の記述が見られる。